イザベラ・バード来日140年　顕彰プロジェクト

イザベラ・バードと日本奥地紀行の旅

イザベラ・バード来日140年　顕彰プロジェクト報告書

令和3年（2021年）3月

一般財団法人　日本みち研究所

■ 目　　次

～はじめに～
イザベラ・バード顕彰プロジェクトとは

第1部　イザベラ・バードと日本奥地紀行の旅
1. イザベラ・バードとはどんな女性だったのか
2. バードが旅した140年前の日本
3. 日本奥地紀行の旅
4. 横浜から日光まで
5. 山王峠を越えて会津へ
6. 川の旅を楽しんだ新潟
7. アルカディアの郷山形を行く
8. 雨の中を旅した秋田
9. 祭りや温泉を楽しんだ青森
10. 最終目的地の北海道

第2部　イザベラ・バード来日140年　顕彰プロジェクトの記録
1. 日本橋パネル展
2. 横浜シンポジウム
3. 日光シンポジウム
4. 北海道シンポジウム

第3部　　顕彰プロジェクトのこれから

～はじめに～

イザベラ・バード顕彰プロジェクトとは

イギリスの探検家であるイザベラ・バードは、明治11年（1878）に来日し、横浜から東北、北海道までを数か月間かけて旅行、「日本奥地紀行」として著した。2018年は来日140年、また2020年が「日本奥地紀行出版」140年にあたることをふまえ、女性一人旅のパイオニアでもあるイザベラの足跡をたどり、この足跡を国内外の多くの人に知ってもらい、さらにイザベラがたどった足跡を国内外の観光客に訪れてもらうため、昨年より顕彰プロジェクトを実施してきました。この冊子はイザベラが来日し上陸した横浜を皮切に、昨年開催された北海道で開催されたシンポジウムをとりまとめたものである。

■第1部　イザベラ・バードと日本奥地紀行の旅

１．イザベラ・バードとはどんな女性だったのか
２．バードが旅した140年前の日本
３．日本奥地紀行の旅
４．横浜から日光まで
５．山王峠を越えて会津へ
６．川の旅を楽しんだ新潟
７．アルカディアの郷山形を行く
８．雨の中を旅した秋田
９．祭りや温泉を楽しんだ青森
１０．最終目的地の北海道

イザベラ・バードはどのような女性だったのか

Who is Isabella Bird?

1896年（明治29）7月に横浜のファルサーリ商会で撮影し、金谷ホテルに寄贈した写真（金谷ホテル所蔵）

Photo taken at A. Farsari & Co., in Yokohama in July 1896, donated to Kanaya Hotel © Nikko Kanaya Hotel.

若いころは病弱だったバード

1831年（天保２）、イギリスのヨークシャーのバラブリッジで、英国国教会牧師の長女として生まれたイザベラ・ルーシー・バードは、幼いころから病弱だった。脊椎の持病に悩まされ、転地療養や船旅が体にいいと医師に勧められて、23歳のときにアメリカとカナダに旅行し、処女作となる『英国女性のアメリカ紀行』を出版した。

バードの旅への意欲は、40歳ころから本格的なものになり、世界各地、それも多くは辺境の地を巡る旅をつづけた。成果を旅行記という形で発表し、その印税収入と新聞・雑誌の原稿料、講演料、夫だったジョン・ビショップ医師や妹のヘンリエッタ、バードの母親などの遺産も旅の費用となった。

ヴィクトリア朝レディ・トラベラーの筆頭

バードが活躍した時代、イギリスではアフリカや南米、中央アジアなどへの探検熱が盛んだった。探検家たちが集まる中心は英国王立地理学協会だったが、女性は会員になることはできなかった。しかし、バードは1891年に王立スコットランド地理学協会の特別会員に迎えられていて、その業績は高い評価を受けていた。英国地理学協会は、1892年に後追いの形でバードを特別会員として受け入れ、その4か月後にはさらに15人のレディ・トラベラーが選出された。バードは女性として、イギリスにおけるトップレディ・トラベラーとして認められたのだ。

バードの妹ヘンリエッタを記念して、スコットランドのヘブリディーズ諸島マル島の港町・トバモリーに建てた時計塔。設計はマッターホルン初登頂した登山家であり、『日本奥地紀行』の挿画を書いたE・ウィンパー

Clock tower built in Tobermory, a port town on the Isle of Mull, in the Hebrides in Scotland. Built as a memorial for Bird's sister Henrietta. The architect was E. Whymper who also illustrated "Unbeaten Tracks in Japan" and was the first climber of the Matterhorn.

スコットランドのスカイ島北部にあるキレーン山。バードが新潟の津川から阿賀野川を下るときの景色を、この山と対比させた

Quiraing mountain on the Isle of Skye of Scotland. Bird compared this mountain with a view when she went down the Aganogawa river from the Tsugawa river, in Niigata.

Sickly life since early life

Isabella Lucy Bird was born in 1831 in Boroughbridge, Yorkshire in England. She was an oldest daughter and her father was a clergyman at the state church. Because of a spinal disease, which she had been struggling with from a young age, a doctor recommended a change of air quality and travelling by boat. Bird went to the USA and Canada at 23 years old, and published her first book "The Englishwoman in America".

Her passion for traveling got stronger when she was around 40 years old. Her voyage continued all over the world, mostly on the frontier. Her memoirs became traveling publications, and she covered travelling expenses with royalties from those publications, fees for articles on newspapers and magazines, lecture fees, and inheritances from her late husband, doctor John Bishop, her sister Henrietta and her mother.

Victorian era. The first female traveler

When Bird was moving around the world, travelling abroad in places such as Africa, South America, Central Asia became a trend in England. The main travelers community in that age was the British Royal Geographical Society, but women were excluded from membership. Bird was already a special member of the Royal Scottish Geographical Society in 1891, and her activities were highly evaluated there. The British Royal Geographical Society, following after Royal Scottish Geographical Society, accepted her as their special member in 1892. Four months later, 15 other women also joined in the society. In another words, Bird was admitted as a first top female traveler of the British Royal Geographical Society.

バードが冒険的な旅行をした国々 Countries and areas of Birds adventures

西暦	Year	年齢	Her Age	旅した国名	Country	旅行記名（出版年）	Publication (Year)
1854	1854	23	23	カナダ、北アメリカ東岸	Canada, Eastern coast of North America	『英国女性のアメリカ紀行』1856	"The Englishwoman in America" (1856)
1857	1857	25~26	25-26	北アメリカ	North America	『アメリカの宗教事情』1859	"The aspects of religion in the United States of America" (1859)
1866	1866	35	35	カナダ	Canada		
1872	1872	40~41	40-41	オーストラリア	Australia		
1873	1873	42	42	ニュージーランド、ハワイ 北アメリカ・ロッキー山脈	New Zealand, Hawaii, North America – Rocky Mountains	『サンドイッチ諸島での半年』1875 『ロッキー山脈生活記』1879	"Six Months in the Sandwich Islands" (1875) "A Lady's Life in the Rocky Mountains" (1879)
1878	1878	46	46	日本	Japan	『日本奥地紀行』1880	"Unbeaten Tracks in Japan" (1880)
1879	1879	47	47	マレー半島	Peninsular Malaysia	『黄金の半島』1883	"The Golden Chersonese" (1883)
1889	1889	57	57	インド、カシミール、チベット	India, Kashmir, Tibet		
1890	1890	58	58	ペルシャ、アルメニア オスマントルコ	Persia, Armenia Ottoman Empire	『ペルシャとクルディスタン』1891	"Journeys in Persia and Kurdistan" (1891)
1894	1894	62~63	62-63	日本、朝鮮、中国、ロシア	Japan, Korea, China, Russia	『朝鮮とその近隣諸国』1898	"Korea and her Neighbors" (1898)
1895	1895	63~64	63-64	上海、中国、日本、朝鮮	Shanghai, China, Japan,Korea		
1896	1896	64~65	64-65	朝鮮、揚子江流域、	Korea, Yangtze River basin area	『揚子江渓谷とその奥地』1899	"The Yangtze Valley and Beyond" (1899)
1901	1901	70	70	モロッコ	Morocco		

バードが旅した140年前の日本

140 years ago when Bird was travelling in Japan

横浜海岸通之図。3代広重が描いた1870年（明治3）、横浜港の港の鼻と呼ばれた税関埠頭の桟橋（横浜開港資料館 所蔵）

Yokohama Kaigan Dori no Zu. Drawn by Hiroshige III in 1870. A custom House Pier, called an elephant's nose of Yokohama port © The Yokohama Archives of History.

江戸から東京になって12年

バードが「日本奥地紀行」の旅をしたのは1878年（明治11）だった。徳川幕府の崩壊、鳥羽・伏見の戦い、戊辰戦争など幕末の動乱を終え、明治政府が成立してから11年経った年で、江戸から東京に名前が変わったのは1868年（慶応4）のことだった。1871年（明治４）の廃藩置県や「散髪脱刀令」（ざんぎり頭）など、社会の混乱がまだ尾を引いていた時期であり、反面、東京のいたるところに大名屋敷が残されている様子などを、バードな目にしている。『日本奥地紀行』の随所から、新しい時代の息吹や急激な変化に戸惑う人々の姿を垣間見ることができる。

文明開化

バードが各地の移動に使った人力車が発明されたのは1869年（明治2）で、横浜と新橋の行き来に使った鉄道が開通したのは1872年（明治5）だった。1873年（明治6）にキリスト教の禁制が解かれ、築地の外国人居留地に多くの伝道教会が集まっていた。また、バードは日本各地で子どもが勉強する姿を見ているが、学校制度の始まりは1872年（明治5）のことだった。バードが初来日する3年前の1875年（明治8）からは、現在の日本通運の前進である内国通運会社が荷物の輸送に力を発揮していた。

バードが日本に上陸したのは横浜港だが、横浜、長崎、函館が外国に向けて開港したのは1859年（安政6）で、1867年（慶応3）に神戸、翌年には新潟が開港されている。

海外に向けた開港より7年前（1859年・安政6）の新潟港。開港前から外国船が来ていたことを伝えてくれる（新潟県立歴史博物館 所蔵）

Niigata port, seven years before it opened as an international port (1859). This tells us that boats from foreign countries were already coming before the port officially opened to international traffic.

バードが山形を訪れたとき建設中だった鉄道。現在は山形市郷土館となっている。（長谷川竹家 画・山形大学附属博物館 所蔵）

Saisetsu, which was still under construction when Bird visited Yamagata. Now it is the Yamagata Prefecture Local Museum (Drawn by Chikaye Hasegawa. © The Museum of Yamagata University).

12 years after Edo became Tokyo

Bird's voyage, documented in "Unbeaten Tracks in Japan", happened in 1878. This was 11 years after the Meiji government was established. After the end of Edo period - the collapse of the Tokugawa period after the battle of Toba-Fushimi, Boshin war - "Edo" changed its name to "Tokyo" in 1868. During her visit, Bird could still see a chaotic society, such as "the abolition of the han system" (new system of prefectures) or "Sanpatsu Datto Rei" (Freedom to choose of own hair style and a rule to prohibited public people to have one's sword). On the other shand, Bird also described that she saw "Daimyo Yashiki", residences of the feudal lords, which were almost disappearing after Meiji periode had started. Through her book, we can feel the atmosphere of the new era and people who were confused by radical changes in a chaotic society.

Civilization and enlightenment

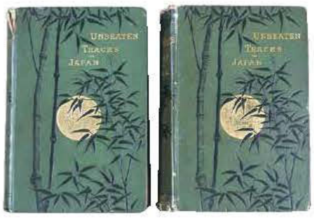
Bird used "Jinrikisha", a pulled rickshaw for transportation. There was investment in a railway between Yokohama and Shinbashi, which was begun in 1869 and was opened in 1872. She also used this. In 1873 the ban Catholicism was lifted, and many missionary associations were gathering around a foreign settlement in Tsukiji. A school system began in 1872, and Bird wrote that she saw children studying everywhere. "Naikoku Tsuun Kaisha", which is now "Nippon Express" helped Bird to transport her baggage during her travels.

Bird arrived in Yokohama port when she came to Japan. In 1859, Yokohama, Nagasaki, Hakodate opened their ports to other countries, and then Kobe in 1867 and Niigata in 1868.

『日本奥地紀行』の旅ルート
Voyage of "Unbeaten Tracks in Japan"
中野もみじ山（青森県黒石市）
Nakano Momiji Mountain (Kuroishi city in Aomori prefecture)
矢立峠の明治新道
（秋田県大館市・青森県平川市）
Meiji Shindo of Yatate Tôge
(Ôdate city in Akita prefecture & Hirakawa city in Aomori prefecture)
金山大蔵（山形県金山町）
Kanayama Ôzeki(Kanayama town in Yamagata prefecture)
大内宿（福島県下郷町）
Ouchi-juku (Shimogô town in Fukushima prefecture)
阿賀野川舟下り（新潟県阿賀町）
Agano River boat down
(Aga town in Niigata prefecture)
日本海
太平洋
凡例
1:1,200,000
パネル制作
一般財団法人 日本みち研究所

『日本奥地紀行』の旅
Voyage of “Unbeaten Tracks in Japan“

「日本奥地紀行」に掲載された秋田の農家　A farmer in Akita, published in "Unbeaten Tracks in Japan".



「日本奥地紀行」(上)(下)の原書
『Unbeaten Tracks in Japan』。
ハイジアパーク南陽(山形県南陽市)所蔵

The original "Unbeaten Tracks in Japan", first and second volume of the Japanese version. © Hygeia Park Nanyō (Nanyō city in Yamagata prefecture).

ブラントン図「NIPPONN」(JYPAN)。バードはこの地図を持って日本の奥地を旅した(横浜開港資料館 所蔵)

"Nippon"(JYPAN) of Brunton. Bird travelled through the interior of Japan with this map © The Yokohama Archives of History

日本の秘境を辿る

サンフランシスコから太平洋を渡り、5月20日に上海経由で横浜港に着岸したバードは、横浜で通訳のイトー（伊藤鶴吉）を雇い、イギリス公使館のパークスが用意した“特別旅券”を手にし、必要な物資を調達するなどして東京を出発した。その行程を簡略に示すと、東京～日光～会津～新潟～山形～秋田～青森～北海道となる。

バードの旅の目的は、日本の奥地の人々の生活を見分し、最終目的地の北海道でアイヌの人たちの生活に触れることだった。バードはなぜ、日本の奥地を旅したかったのか？　キリスト教の布教と伝道の目的もあったのか？ イギリスのスパイ説もあるがそうなのか？

バードの旅の目的とは？

バードの言葉を借りると、「1,400マイル（約2,250キロ）以上にわたる陸路の旅」となる。そのルートとしてバードは、よく知られた道を外したコースをあえて選び、人力車や牛や馬、徒歩、川舟などで移動した。「私は日本人の生活の中ですごし、ヨーロッパ人の影響を受けていない地域の日本人の暮らしを見たかった」と記している。バードはこのような旅の仕方を、世界各地で実行しており、これこそがバードの旅の真骨頂だった。

敬虔な英国国教会の牧師の娘として育ったバードは、熱心なキリスト教徒だったが、日本でキリスト教の布教や伝導を行った記録は見当たらない。また、スパイ説はともかくとして、バードの旅の記録がイギリス政府にとって、貴重な情報となったのは間違いないだろう。女性ならではの生活に密着した記録は、男性からは得ることができないものだったと思われる。

バードが悪路と悪天候で悩まされた十三峠の黒沢峠(山形県小国町)

Kurosawa Tōge of Jyusan Tōge where Bird had troubles with a bad route and bad weather (Oguni town, in Yamagata prefecture).

Visiting Japanese unexplored places

Bird came to Yokohama port on 20th of May via Shanghai from San Francisco and Pacific Ocean. She hired an interpreter, Ito (Tsurukichi Ito), got a special passport from Parkes at the British embassy, bought enough materials for travelling, and left Tokyo. Her route included: Tokyo, Nikko, Aizu, Niigata, Yamagata, Akita, Aomori, and Hokkaido.

Her purpose was to observe local people’s lifestyle in remote areas, and the final goal was to see Ainu people’s everyday life. Why did she choose remote areas? For missionary work? Some people say she was a spy, can it be true?

Purpose of her voyage?

Bird described her days as “a land route travelling more than 1400 miles”. She tended to choose unknown routes on purpose, and used a pulled rickshaw, cows, horses, boat, and travelled on foot. According to her, “I wanted to spend time in the Japanese lifestyle and see the Japanese way of living which has not affected by European movements”. This was her way of traveling, and she used this method all over the world. This was indeed the true worth of her voyage.

Bird was brought up by her father, who was a clergyman of the state church. She was an enthusiastic Christian, but no document shows that she did a missionary work in Japan. Some people say that she was a spy. Regardless, her traveling memoirs about local people were surely important information for the British government. Her way of reporting local lifestyles as a woman might not have been observed had she been a man.

横浜から東京、日光まで
From Yokohama to Tokyo, Nikko

バードが旅立った英国公使館跡地に建つ英国大使館（東京都千代田区）
The British Embassy, standing on the former site of the British Legation, where Bird left from (Chiyoda area in Tokyo).

バードの旅の第一夜となった粕壁（春日部）の脇本陣だった高砂屋付近の模型（春日部市郷土資料館 所蔵）
A model of the area around Takasagoya, where Bird spent her first night. The place was "Wakihonjin" of Kasukabe (a reserved area of "Hanjin"). © Kasukabe History Museum

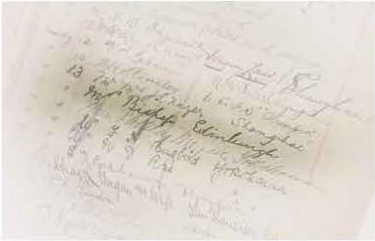
東京を出て、粕壁、栃木、今市に宿泊

バードは6月10日に東京の英国公使館を出発した。日光街道（奥州街道）を北上し、旅の第一夜は粕壁（春日部）の宿だった。持参した携帯用ベッドとゴムの浴槽を蚊帳の中に広げたが、三味線の音、読経の声、多数のおしゃべりが屋内から聞こえ、屋外からは太鼓や按摩の笛の音などが入ってきて、まんじりともしないで朝を迎えた。このような宿屋の状況は、後々まで続くことになる。

利根川を渡り、奥州街道から分かれて例幣使街道を進み、栃木の「大和屋」と推定される旅館に宿泊したが、粕壁を上回る騒音が午前１時過ぎまで続いた。宿では散々な目にあったが、城下町の栃木について、「今まで通過した町々よりどっしりしていて美しい姿」と書いている。

例幣使街道・壬生通りは、宇都宮を通らないで今市に向かっていた街道で、途中で見た日光杉並木をバードは「壮大な記念碑」と絶賛。静かな町・今市で、ようやく一晩ぐっすり休むことができた。

バードが日光で宿泊したカナヤ・カッテージ・イン、「サムライ屋敷」とも呼ばれていた
"Kanaya Cottage Inn", where Bird stayed in Nikkō. It was also called "Samurai House" (Nikkō in Tochigi prefecture).



バードが1896年（明治29）に金谷ホテルに宿泊した際の宿帳のサイン（日光金谷ホテル 所蔵）
A signature in the guest book of Kanaya Hotel, where Bird stayed © Nikkō Kanaya Hotel.

日光見ずして結構というなかれ

今市からは日光街道で日光へと進んだ。日光の宿泊先は、金谷ホテルの創業者が経営していたカナヤ・カッテージ・インなどで、日光には都合11日間滞在した。この間、日光東照宮、輪王寺、奥日光の湯元などを見物し「私は（略）"結構"という言葉を使う資格がある」と、日光を堪能した喜びを表している。

日光から新潟まで行くルート選びで、持参したブラントンの「日本地図」を前に悩んだ末、「私は田島に行く」と決めて会津地方に向かうことにした。日光から今市近くまで戻り、栃木県と福島県境にある山王峠を越え、田島を経て若松（会津若松）までつなぐ下野街道（会津西街道）を使った。山王峠までの途中、藤原、五十里で泊まっている。

山王峠ふもとにある鶏川の町並み（栃木県日光市鶏川）
A city view of Yokokawa, at the foot of Sannō Tōge (Yokokawa, Nikkō city in Tochigi Prefecture).

Left Tokyo, and stayed in Kasukabe, Tochigi, Imaichi

Bird left the British embassy in Tokyo on the 10th of June and went north via "Nikkō Kaidō" (Ōshū Kaidō), and stayed her first night in Kasukabe. She set her portable bed and rubber bathtub inside a mosquito net. However, the sounds of Shamisen (a Japanese stringed intrucment), sutra recitation, people chatting came from inside of the building. The sound of a drum and a flute from outside. After a poor night's sleep, morning came. This kind of night experience continued throughout her stay.

After passing the Tonegawa river and the Reiheishi Kaidō which separates from Ōshū Kaidō, she stayed at a traditional Japanese inn. This place is thought to have been "Yamatoya" in Tochigi. The noise was much louder there than the first place, and it continued until 1:00 AM. It was not an enjoyable night, but she wrote that "Tochigi was much more dignified and beautiful than other cities".

Bird passed Reiheishi Kaidō, Mibumi street and travelled towards Imaichi, without going through Utsunomiya. On the way, she praised "Nikko Suginamiki" as "a spectacular monument", and had a good rest in a quiet Machiima city.

Never say "Kekkō" until you've seen Nikkō

Bird went to Nikkō from Imaichi via Nikkō Kaidō. She stayed at several hotels such as "Kanaya Cottage Inn", which was managed by Kanaya Hotel's owner. She stayed there for 11 days. After visiting Nikkō Tōshō-gū, Rinnō-ji and Yumoto in Okunikkō, Bird expressed her satisfaction toward Nikkō, writing "I have a right to use a Japanese word Kekkō".

> "Kekkō" means "so fantastic". Nikkō Tōshō-gū, shrine located there was one of the best examples of Japanese architecture, and an expression "Never say Kekkō until you've seen Nikkō Tōshō-gū" was born.

With a map of Japan by Brunton, she was wondering which route she should take from Nikkō to Niigata. In the end, she decided to go to Tajima, and went toward Aizu area. Back from Nikkō to near Imaichi, passed through Sannō Tōge between Tochigi and Fukushima prefectures, then Tajima, and went through Shimotsuke Kaidō (Aizu Nishi Kaidō). On the way to Sannō Tōge, she stayed at Fujiwara and Ikari.

山王峠を越えて会津へ
From Sannō Tōge to Aizu

山王峠を下りて宿泊した川島の風景（福島県南会津町）
A distant view of Kawashima, where Bird stayed after going down from Sannō Tōge (Minami Aizu town in Fukushima prefecture).

今も残る美濃屋

関東と東北の境でもある山王峠を下ったバードは、川島に泊まった後、田島を通りすぎて、今では宿場の景観が素晴らしいと評判の大内宿の美濃屋（阿部家）に宿泊した。この家は名主であり内国通運会社や郵便局も兼務していた。

バードは若松（会津若松）には立ち寄らなかったため、いろいろな憶測が生まれている。確かなのは、バード手持ちのブラントン「日本地図」には大内から若松へのルートが描かれていなかったことと、選んだルートが新潟への近道だったことである。大内宿の先で下野街道と別れ、市野峠を下って市野に着いた。

越後街道を旅する

市川から高田（現会津美里町）に進んで宿泊した。高田では宿に着いて町を出るまで1,000人もの見物人に圧倒され、4人の警察官に付き添われ町の郊外に出た。その日の宿泊地となった坂下（ばんげ）は、若松と越後の新発田を結ぶ越後街道を代表する大きな宿場町だった。坂下では雨宿りのため干し魚（北前船で運ばれたニシンやマダラか?）の小屋に入ったが、あまりの悪臭に辟易している。

坂下でも2,000人もの見物客に見舞われた。越後街道を西に進み、束松峠（たばかぶつ）、車峠、鳥井峠を越えて越後の津川に向かった。途中、バードは只見川にかかる片門舟橋（かたかど）に驚いている。「12隻の大きな平底舟」は、大綱で結んだ舟橋だったのだ。

かつての宿場の雰囲気が残る大内宿。バードが泊まった旅籠屋（阿部家）は当時の様子を伝えている（福島県下郷町）
You can still see the atmosphere of the earlier hotel at Ouchi-juku. Minoya (Abe Family), where Bird stayed. It shows how it was at the time (Shimogō town in Fukushima prefecture).

美濃屋でバードが泊まった部屋
Bird stayed in this room in Minoya.

大内から市野峠を下ったところにある市野集落（福島県南会津郡下郷町）
Ichino settlement, situated down from Ichinono Tōge, in Ouchi (Aizu Misato town in Fukushima prefecture).

バードが船橋を見て驚いた只見川の片門舟橋付近（福島県会津坂下町）
Around the Katakadobashi bridge, over the Tadamigawa river, where Bird was surprised to see a pontoon bridge (Aizubange town in Fukushima prefecture).

高田から坂下に向かう途中、南方向に会津駒ヶ岳山が見える（福島県会津美里町）
On the way to Sakashita from Takada, you can see Aizubandaisan (Misato town in Fukushima prefecture).

Minoya, which still exists

After Bird crossed Sannō Tōge, which was a border between Kantō and Tōhoku area, she stayed in Kawashima. Then Tajima, and stayed at Minoya (Abe Famiry) in Ouchi-juku, which had a good reputation and a nice view. This place was run by a village headman, who was also administrating a logistics service company and post office.

There are some theories why Bird did not go to Wakamatsu (Aizu Wakamatsu). What is sure is that in her Brunton map, a route from Ōuchi to Wakamatsu was not drawn, and the route she chose was a short cut to Niigata. After Ouchi-juku and Shimotsuke Kaidō, she went down Ichino Tōge, and arrived in Ichino.

Travelling Echigo Kaidō

Bird lodged in Takada (Now: Aizu Misato city). Bird was surprised by more than 1000 people who were curious about her, and she had to be escorted from the city by four policemen. She stayed in Bange. It was a big hotel town on the Echigo Kaidō, connecting Aizu Wakamatsu and Shibata in Echigo. In Sakashita, it was raining and she had a break inside of a small cabin of dried fish (Nishin: herring, and Madara: pacific cod, which were transported by Kitamaebune-boat), but she did not like the bad smell there.

In Bange, there were again more than 2000 curious people waiting for her. Bird continued travelling west via Echigo Kaidō, then Tabanematsu Tōge, Kuruma Tōge, Torii Tōge toward the next destination: Tsugawa in Echigo. On the way, she was surprised by Katakadobashi-bridge over Tadamigawa-river. "Twelve big flatboats" was a Pontoon bridge tied with big ropes.

川の旅を楽しんだ新潟
River trip in Niigata

津川の郊外、阿賀野川沿いにそびえる本名岩。バードはこの山をキレーン山に似ていると感じたのかもしれない（新潟県阿賀町）

Honzeniwa, sitting along the Aganogawa river, is the suburbs of Tsugawa. Bird felt that the shape of this mountain is similar to Mt. Quiraing in Scotland (Aga town in Niigata prefecture).

阿賀野川を下る川旅

只見川と合流するまで阿賀川と呼ばれていた川は、合流地点より下流は阿賀野川となる。阿賀野川の川湊として栄え、宿場町でもあった津川は、バードが訪れた当時はまだ福島県だった（その後、新潟県に編入）。津川の町で菓子屋を回って砂糖を使ったいくつかの菓子と、「フレッシュ・サーモンの切り身」を食べたと書いているが、7月初めという時期を考えると、サケではなくサクラマスだったと思われる。

連泊した津川から先は阿賀野川を川舟で下った。まったく予想していなかったが、舟からの景色が素晴らしく、スコットランドのスカイ島北部にあるキレーン山やドイツのライン川にも劣らないと褒めたたえた。その後、バードを乗せた川舟は阿賀野川から運河の小阿賀野川を経由し、信濃川に出て新潟の町に入った。

開港都市新潟

すでに開港されていた新潟だったが、バードが期待したほどの賑わいはなかった。新潟ではファイソン牧師宅に宿泊。医療伝導を行っていたパーム博士を訪ねるなどして、1週間ほど滞在した。新潟の町を、「清潔で居心地よい町」という印象を持ち、寺町やさまざまな商店、立派な学校、大きな病院、県庁、裁判所などをめぐった。特筆すべきは食べ物と料理に関する長い記述だ。さまざまな食材、料理、菓子、調理道具などが書かれたページからは、女性ならではの関心がほとばしる。

新潟からは蒸気船で函館に向かうという当初の計画だったのだが、1か月ほど船便がないことを知り、陸路を進む決意をする。信濃川と阿賀野川をつなぐ新川（通船川）、加治川とさらに舟の旅を繰り返し、木崎に上陸した。その後は陸路で築地、黒川からいよいよ内陸に向かい、荒川沿いに東進して越後・米沢街道の十三峠に入った。

新潟の英国領事館跡。新潟には1869年（明治2）から1879（明治12）まで置かれた（新潟県新潟市）

The former site of the British Consulate in Niigata, which was standing there from 1869 to 1879 (Niigata city in Niigata prefecture).

旧新潟税関庁舎。1869（明治2）に新潟運上所、1873年（明治6）に新潟税関となり1966年（昭和41）に税関の役目を終えた（新潟県新潟市）

The earlier government' custom office in Niigata. "Niigata Unjyōsho" built in 1869 finished its role in 1966, and became Niigata Customs in 1973 (Niigata city in Niigata prefecture).

バードが通った築地の町並み（新潟県中条町）

A town view of Tsuiji, where Bird used to go (Nakajyō town in Niigata prefecture).

十三峠の一つ榎峠（新潟県関川村）

Enoki Tōge of Jyuusan Tōge (Sekikawa town in Niigata prefecture).

River trip going down Aganogawa river

There was a river called Agagawa river until it joins Tadamigawa river. After the meeting point, downstream was called Aganogawa river. Tsugawa was a river port on the Aganogawa river and a hotel area. This area was still Fukushima prefecture at that time (it joined with Niigata later). It seems like Bird visited a sweet shop in Tsugawa town, and ate some sweets made with sugar and "fresh salmons slices". But considering that the time was a beginning of July, it could be "sakuramasu" (Oncorhynchus masou) which she ate, not "sake" (salmon).

After some nights in Tsugawa, Bird took a riverboat from Aganogawa river. It was unexpected, but the boat view was so fantastic that Bird praised that it was as beautiful as Quiraing mountain on the Isle of Skye of Scotland, or the Rhine river of Germany. Her boat went through Aganogawa river, Koaganogawa river, Shinanogawa river toward Niigata town.

Open port city, Niigata

Niigata was already an open port city, but there were not so many activities as Bird had expected. She spent about one week there, staying at the house of a bishop Fyson, and visiting Dr.Palm who was spreading his medical knowledge. She got the impression that Niigata town was "clean and comfortable", and visited the temple area, shops, an excellent school, a big hospital, the prefecturale office, the courthouse etc. She wrote long texts about food, cooking, sweets and kitchenware, and those could not have been noticed by male travelers.

First plan was to leave Niigata toward north by a steamship over the Sea of Japan, to Hakodate. But there were no ships for coming one month, therefore she decided to go overland. First she travelled along the Shinkawa river (Tsuusengawa river) which connects Shinanogawa river and Aganogawa river. Then Kajikawa river, and arrived Kizaki after several boat trips. Then went overland from Tuiji and Kurokawa inland, west along Arakawa river, and entered in Jyuusan Tōge in Yonezawa Kaidō, Echigo.

アルカディアの郷山形を行く
Walking in Arcadia town, Yamagata

バードが難儀を強いられた十三峠の黒沢峠。敷石道が美しい（山形県小国町）
Kurosawa Tōge of Jyuusan Tōge where Bird had troubles. Beautiful Shikishinichi (Oguni town in Yamagata prefecture).

十三峠の一つ宇津峠から見た米沢平野（置賜盆地）の遠望（山形県小国町）
A distant view of Yonezawa Heiya (Okitama Bonchi), observed from Utsu Tōge , in Jyuusan Tōge (Oguni town in Yamagata prefecture).

過酷な十三峠越え

十三峠越えは、きわめて難儀だった。十三もの峠が続く街道で、三つ目となる大里峠から先が山形県であった。土砂降りの雨とあまりの難路に、乗ってきた人力車と車夫が帰ってしまった。馬や牛と人夫を雇い、途中2泊してすべての峠を越えた。間違いなくここは、本州で最も厳しい難関の一つだった。

峠越えを終えて米沢平野（置賜盆地）の小松に下りるころには天気も良くなり、そこで見た景色を「アジアのアルカディア」として絶賛した。小松、赤湯と進み、上山からは羽州街道に入った。上山では旅館の会津屋に宿泊し、美しい娘と出会ってスケッチを残している。

世界で唯一のバード記念室。バードの著書やバードが愛したビクトリア朝時代の旅行用具などが展示されている（山形県南陽市）
The only Bird memorial room in the world exhibiting her books, travelling materials from Victorian era that she used when she was on a trip (Nanyō city in Yamagata prefecture).

羽州街道をゆく

上山を出て山形に入った。山形では県庁、大きな病院（済生館）、製糸工場、学校などを外から眺めたが、山形には宿泊しないで天童に向かった。天童から先は麩で知られる六田（東根市）を過ぎ、楯岡（村山市）に宿泊した。その後は、土生田（村山市）、尾花沢と北上し、左手に鳥海山の素晴らしい姿を見ながら狼羽根峠を越え、舟形、新庄と羽州街道を進んだ。新庄は戊辰戦争の戦火で壊滅的な被害を受けてから10年。復興はまだ半ばだった。

新庄で一泊し、金山に向かった。金山の町に入る直前の上台峠から町を眺めると、三角の形をした山が並んでいた。金山では鶏を入手することが出来、久しぶりの鶏肉に大いなる喜びを感じている。山間の静かな町金山では、町並みを見学したり医者にあったりして、ゆっくり過ごすことが出来た。

金山を出て主寝坂峠を過ぎ、秋田県との境となる雄勝峠まで進んだ。通り過ぎるのに9日間を要した山形だった。

天童公園文学の森に立つ「イザベラ・バード文学碑」（山形県天童市）
"Literary monument of Isabella Bird" standing in a forest of literature at Tendō Park (Tendō city in Yamagata prefecture).

バードが見た完成間近だった「大きな病院」済生館。現在は山形市郷土館として霞城公園内に移築されている（山形県山形市）
«Big hospital», Saiseikan, which Bird saw when it had nearly finished being built. Now it is located in Kajō Park, serving as Yamagata City Local Historical Museum (Yamagata city in Yamagata prefecture).

山形県北部の町金山を、上台峠付近から望む。三角の形をした山が特徴的だ（山形県金山町）
The view overlooking Kanayama town, in the north of Yamagata prefecture, as seen from nearby Uwadai Tōge. It is characterized by a triangular shape (Kanayama town in Yamagata prefecture).

Hard climbing Jyuusan Tōge

It was a very hard to climb up Jyuusan Tōge, a route with thirteen mountain paths. After Oori Tōge, the third path, she arrived in Yamagata prefecture. It was a difficult route with lots of heavy rains, and the rickshaw man went back home. Bird hired a laborer with a horse and cow, and passed all paths after two nights. Without a doubt, this was the most difficult route on the main island of Japan.

After the pass, she came down to Komatsu in Yonazawa Heiya (Okitama Bonchi). The weather became better, and she praised the view from there "Arcadia in Asia". After Komatsu, Akayu, she came into Ushū Kaidō after Kaminoyama. In Kaminoyama, Bird stayed at a hotel, Aizuya, met a beautiful lady, and left a sketch.

Going to Ushū Kaidō

After Kaminoyama, Bird arrived in Yamagata. There she saw the prefectural office, a big hospital (Saiseikan), a silk mill and, a school. Without lodging there, she went to Tendō, Rokuta (famous for wheat gluten), and stayed in Tateoka (Murayama city). She continued toward north to Tochiuda (Murayama city), Obanazawa, passing Sabane Tōge with a beautiful view of Mount Chōkai on the left side. Continued to Funagata, Shinjō and Ushū Kaidō. Reconstruction of Shinjō was still only half finished, after ten years since the area suffered catastrophic damage during the Boshin War.

After one night in Shinjō, Bird continued to Kanayama. Just before entering to Kanayama town, she overlooked the town from Uwadai Tōge, and there were triangle mountains. In Kanayama, she bought a chicken and was so happy to eat it after a long time. The town situating between mountains, and quiet. She visited the area, met a doctor, and spent a relaxing time.
She passed Shunezaka Tōge after Kanayama, and continued to Ogachi Tōge which was on the border of Akita prefecture. In the end, Bird spent nine days to cross Yamagata.

雨の中を旅した秋田
Rainy trip in Akita

山形と秋田県境となる雄勝峠(院内峠)。当時、山形県の三島通庸県令は、峠をぶち抜くトンネル構想を持っていたが実現しなかった(山形県真室川町・秋田県湯沢市)

Ogachi Tōge (Innai Tōge) which is on the a border between Yamagata and Akita prefecture. At that time, Governor Michitsune Mishima of Yamagata prefecture had a plan to dig a tunnel through the pass, but it was not realized (It was to run from Mamurogawa town in Yamagata prefecture, Yuzawa city in Akita prefecture).

神宮寺の川湊付近。バードはこの近くから雄物川を川舟で下り、久保田(秋田市)まで行った(秋田県大仙市)

Near the riverport of Jingū-ji. Bird went down the Omonogawa river from near here with a river boat, and went down to Kubota, (Akita city). (Daisen city, in Akita prefecture).

六郷で「裕福な商人の葬式」を見学したバード。調査により本覚寺で営まれたものと判明。写真右端がその仁井田仁助の墓石(秋田県美郷町)

Bird saw "a rich merchant's funeral" in Rokugō. It was discovered later that it taken place in Hongakuji. To the right of the photo is a gravestone of the merchant, Jinsuke Niida (Sangō town, in Akita prefecture).

雄物川を川舟で下る

バードは雄勝峠を越えて院内で1泊した。宿では峠の新道工事のための日本人測量技師と一緒になった。湯沢の町では大きな火事があり騒然としていたため、宿泊の予定を変更して先に進んだ。横手、六郷と宿泊したが、横手付近では秀麗な鳥海山の姿に感激し、六郷ではちょうど行われていた裕福な商人の葬式を変装して見学した。好奇心旺盛なバードらしい振舞といえる。

大曲の先の神宮寺でバードは、思いがけない行動に出て新しい旅にチャレンジした。反対する駅逓(えきてい)や船頭を尻目に、久保田(秋田市)まで雄物川を川舟で下ろうと言い出したのだ。陸路の羽州街道を歩けば2日はかかるだろうと思われるが、川舟は陸路で42マイル(約67キロ)の行程を、わずか9時間で済ませ、「私の計画が正しかった」と喜んだ。

久保田の町でバードに西洋料理の仕出しをした可能性がある[illegible]跡、現在の料亭濱之家付近らしい(秋田県秋田市)

The former site of Yokaiken, which delivered Western food to Bird in Kubota town. It was situated near the Hamanoya Restaurant (Akita city, in Akita prefecture).

感激した久保田の町

久保田では4泊したが、大いに感激したことが起きた。宿泊した旅館の近くに西洋料理店があり、おいしいビフテキ、カレー、キュウリ、外国産の塩とマスタードなどを食することが出来たのだ。県庁、病院、学校、織物工場などを見学して歩き、さらに旅館の主人の計らいで、姪の結婚式に招待されたりした。ゆっくりとした時間を過ごすことが出来、「私はほかのどんな町よりも久保田が好きだ」と表現している。

久保田の町を出たバードは、土崎で祭りを見たが、それは土崎神明社祭の曳山行事だった(秋田県秋田市)

Bird saw a festival in Tsuchizaki after she went left Kubota town. It was actually the Hikiyama Gyōji event of the Tsuchizaki Shinmeisha Festival (Akita city, in Akita prefecture).

久保田を出て、北前船で栄えている港町の土崎に入ると祭りの最中で、巨大な曳き山が町内を練り歩いていた。八郎潟の近くを通ったときには、二人のオランダ人技師が築港のための調査をしていたと書いている。八郎潟東岸の羽州街道を北上したが、連日の雨で道は泥でぬかるんで田んぼのようになっていた。桧山(ひやま)を過ぎて切石に着いてみると、降り続く雨で米代川が増水し、渦を巻いて流れていた。バードたちが乗った小さな平底舟の目の前で屋形舟が大木にぶつかり、乗っていた8人の人たちが川に投げ出された。大館の町も戊辰戦争(ぼしんせんそう)で焼き討ちに会い、悲惨な状況だった。青森との県境となる矢立峠の手前の白沢で一泊し、増水した川では渡渉を繰り返し、峠を越えて青森県に入った。最悪の天候の秋田だった。

増水した米代川の切石付近。連日の雨で米代川は増水し、バードたちも命がけの渡河だった(秋田県能代市)

Near Kirishi on the Yoneshirogawa river, which suffered flooding. The river was swollen after several days of heavy rains, and Bird crossed the river at the risk of her life (Noshiro city in Akita prefecture).

Going down Omonogawa river by boat

Bird passed Ogachi Tōge, and stayed one night in Innai. In the lodge, she was together with a surveying engineer because of the construction of a new road in a pass. In Yuzawa, a big fire accident happened. Because of that chaos, Bird changed her plan to stay there and continued her trip further. She lodged in Yokote and Rokugō. Around Yokote, she was moved by beautiful Mount Chōkai. In Rokugō, she changed her appearnce in order to see a rich merchants funeral. This episode shows how curious person she was.

In Jingū-ji temple after Ōmagari, Bird acted surprisingly and took up the challenge to travel in a new way. Igniring the protests of the person in charge at a post office and a boatman, she insisted in going down the Omonogawa river in a river boat to Kubota (Akita city). She might have chosen to go overland on foot on the Ushū Kaidō. But her choice of river way by a boat took only nine hours for trip of 42 miles (around 67 km). "My plan was right", Bird was happy.

Impressed by Kubota

During four nights stay in Kubota, Bird had a surprisingly positive experience. Near her hotel, there was a Western restaurant, and she ate delicious beef steak, curry rice, cucumber, salt and mustard from abroad. Visiting on foot after the prefectural office, a hospital, a school and a textile factory, she was invited to a wedding of a hotel owner's niece. After a relaxing time there, Bird expressed "I like Kubota much more than other towns".

After Kubota, Bird came to Tsuchizaki, a port town flourishing with the Kitamaebune (northern-bound ships). There was a festival and huge festival floats being walked around the town. When she passed by Hachirōgata, two Dutch engineers were doing research for building a port. She continued north on Ushū Kaidō along the east coast in Hachirōgata, the road was like a muddy rice field because of heavy rain over several days. After Hiyama, Bird arrived to Kirlishi. Yoneshirogawa river was flooding with whirlpools because of several rainy days. In front of Bird's small flatboat, another boat bumped into a large tree, and eight people on board were thrown into the river. Ōdate town was also set on fire during Boshin War, and the situation there was still horrible. Bird spent one night at Shirasawa, which was situated just before Yatate Tōge, the boarder of Aomori prefecture. In the flooded river, they tried to go further and had to turn back many times, but they finally entered Aomori after crossing a pass. It was horrible weather in Akita.

祭りや温泉を楽しんだ青森
Enjoyed festival and hot spring in Aomori

バードは完成して間もない、矢立峠の明治新道を通った（秋田県大館市・青森県平川市）
Bird crossed Meiji Shindō in Yatate Tōge, which had just been built (Ōdate city, in Akita prefecture, & Hirakawa city, in Aomori prefecture).

羽州街道から分かれ、黒石に向かう乳井街道では岩木山を見ながら進む（青森県平川市）
After the Ushū Kaidō, she took the Nyūi Kaidō in the direction of Kuroishi, and saw Mt. Iwakisan on the way (Hirakawa city, in Aomori prefecture).

矢立峠で大雨に見舞われたバードは、ここ碇ヶ関で大きな橋の流失を見るなどした（青森県平川市）
Bird experienced heavy rains in Yatate Tōge, and saw a big bridge get washed away, in Ikarigaseki (Hirakawa city, in Aomori prefecture).

矢立峠を越えて津軽へ

秋田県と青森県境の矢立峠は、1881年（明治14）に行われる明治天皇の東北・北海道巡幸のため、従来の羽州街道とは別に明治新道（羽州街道の新ルート）を建設、峠の勾配をゆるくし、馬車が通れるようにした工事が完成していた。秋田杉の天然林に感動し、さらに峠から美しい景色を眺めて「日本で見てきたどの峠よりもこの峠が素晴らしい」と絶賛した。一方、降り続く雨のため「まるで川を泳ぐようにして峠を下り」、温泉町の碇ヶ関に着いてようやく安堵した。碇ヶ関では子どもたちの遊びや勉強、村人の生活の様子を興味深く見ている。碇ケ関には３泊し、大鰐の鯖石から羽州街道をそれて、乳井街道で黒石に向かった。

黒石は「こみせ」という木製アーケードがある町だ。道路を挟んだ大きな家が、バードが泊まった可能性がある盛家（当時は須藤善次郎家）だ（青森県黒石市）
Kuroishi town has a wooden arcade called "Komise". The big house on the opposite side of the road is the Mori Family house, where Bird may have stayed (it was the Zenjirō Sutō Family home at that time) (Kuroishi city, in Aomori prefecture).

通訳のイトーを置いて、バードが小旅行で行った中野神社（青森県黒石市）
After leaving her interpreter, Ito, Bird went to Nakano Jinja for a short trip (Kuroishi city, in Aomori prefecture).

津軽海峡を渡る船が出港した青森。当時の桟橋は、写真の８階建マンションの先にあった（青森県青森市）
Aomori, where the boat that crossed the Tsugaru Strait left from. At that time, a pier was situated beyond an eight floor apartment (Aomori city in Aomori prefecture).

黒石で何を見たのか

弘前藩の支藩だった黒石藩は、幕末は1万石と小藩だったが、商業が盛んで町も賑わっていた。「人口5,500人のきれいな町で、下駄と櫛を生産している」と黒石を紹介している。バードが宿泊した家は特定されていないが、国指定重要文化財となっている高橋家の隣にあった盛家（当時は須藤善次郎家）説が有力だ。宿泊した家の2階から、隣家の結婚式の様子を眺め、町内では祭りの黒石ねぷたや、高さ6～7メートルの柱に乗ったたくさんの屋根が付いた台などを見ている。

黒石には４～5泊したようだ。長逗留したうちの一日は、通訳のイトーを残して小旅行を楽しんだ。美しい紅葉で知られる中野もみじ山、中野神社、混浴だったが礼儀作法が行き届いた温湯温泉などを訪ね歩いている。

久しぶりの骨休みができた黒石だったが、青森に向かう途中、函館行の船の出港が近いという情報が入り、バードは青森に向けて羽州街道を急いだ。青森港で三菱会社の乗船券を手に入れ、ようやく津軽海峡を渡る船客となった。

To Tsugaru passing across Yatate Tōge

Yatate Tōge was in the border between Akita and Aomori prefectures. Because of Emperor Meiji's visit in Northeast and Hokkaido in 1881, a road construction was done for horse wagons, and a slope of the pass was more gentle. That road was called Meiji Shindō, which was a different kind of road to the Ushū Kaidō, but a new route of Ushū Kaidō. She saw natural woodland of "Akita Sugi" (Japanese cedar in Akita), saw a beautiful view from the pass, and said "This pass is the most beautiful one I have ever seen in Japan". Because of heavy rain. she "went down the pass swimming", arrived finally and relieved in Ikarigaseki, a town with a hot spring. There, she observed children playing and studying, and local people's lifestyle. After staying three nights, she continued her trip to Sabaishi in Oowani.Then Ushū Kaidō, and took Nyūi Kaidō direction of Kuroishi.

What she saw in Kuroishi

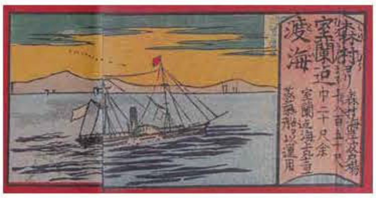
Kuroishi Domain (Kuroishi -han), a sub domain of Hirosaki Domain, was a small domain at the end of Edo period. But this town was bustling with people and active commerce. Bird described Kuroishi as "a beautiful town with 5500 habitants, and producing Geta (wooden clogs) and combs". We do not know which house she stayed in, but the most possible place she might have slept is Mori Family (a house of Zenjirō Sutō), which was next to the Takahashi Family, a nationally important cultural property. From the second floor where she stayed, she saw a wedding in the next house. In town, she watched the Kuroishi Neputa Festival, and a stand with lots of roofs supported by poles of six or seven meters.

She spent four, five nights in Kuroishi. In one of these long stays, Bird enjoyed a small trip without her interpreter Ito. She visited: Nakano Momiji Mountain which is famous for its beautiful autumn foliage, Nakano Shrine, and Nuruyu Onsen, a hot spring, with mixed bathing for men and women with a good service.
It was a holiday, after all, while she relaxed in Kuroishi, but she got information on the way to Aomori that a boat to Hakodate is leaving soon. So she had to hurry up the Ushū Kaidō to Aomori. She got a boat ticket of Mitsubishi Company in Aomori port, and she became a boat passenger to cross the Tsugaru Strait (Tsugaru Kaikyō).

最終目的地の北海道
Last destination, Hokkaido

バードが着いた東浜桟橋を復元した観光的な桟橋（北海道函館市）
A tourist pier: the restored Higashihama Sanbashi pier where Bird arrived (Hakodate city, in Hokkaido).

函館聖ヨハネ教会。宿泊の宿泊先だった英国聖公会の牧師館は、この函館聖ヨハネ教会の場所に建っていた（北海道函館市）
Hakodate St. John's Church. A rectory of the Church of England, which was her accommodation in Hakodate, was likely to have stood here (Hakodate city, in Hokkaido).



すごろくの絵に見る森蘭航路の外輪船（北海道森町）
The Shinran Kouro, a paddle steamer, which you can find on Sugoroku (Japanese board game).

開港都市函館

津軽海峡を渡る外輪汽船は70トン程度の小型の船だった。嵐の荒波をかき分け、朝早く函館の桟橋に到着した。函館は横浜や新潟と同じ開港都市だった。そのため、キリスト教会が多く、バードはそのうちの一つ英国聖公会のデニング牧師の館に9泊した。とりあえず英国領事館に旅の報告をした後、病院や刑務所など函館の街をいろいろ巡った。

長逗留した函館から森までは札幌本道を辿った。七飯（ななえ）ではリンゴ栽培や畜産、酪農の農業試験所などを目にし、蓴菜沼（じゅんさいぬま）、大沼を通過し、森の町に着いた。森の宿泊先は、いまは名物駅弁「イカめし」の製造元である阿部旅館だったと言われている。森からは噴火湾を横断する森蘭（しんらん）航路の蒸気船で室蘭に渡った。まだ寒村だった室蘭から先は、札幌本道を人力車にゆられながら進んだ。

森蘭航路の森桟橋跡。防波堤のない桟橋は何度も壊れたという（北海道森町）
Former site of Mori Sanbashi, on the Shinran Kouro. The pier without seawalls had been broken many times (Mori town in Hokkaido).

最終目的地のアイヌ集落に到着

幌別、白老、苫小牧、勇払（ゆうふつ）、厚真、鵡川（むかわ）と太平洋沿岸を進んだ。苫小牧付近では樽前山などの火山を見て、その噴火で飛ばされてきた「軽石が地表をおおっている」と記している。勇払から鵡川、佐瑠太（さるふと）までは海岸にそって乗馬で進み、最終目的地の平取（びらとり）に向かう道はすべて森の中を通るコースで、細々とした幅の道の両側は草木に覆われていた。

ようやく平取に着き、落ち着いた先はコタンの長老であるペンリウクのチセ（家）だった。数日間過ごした平取では、アイヌの風俗習慣の聞き取りをし、一緒に食事をし、弓矢や毒矢、小刀、生活用具などを購入した。また、病気の治療を頼まれ、薬を与えたりもした。

いよいよ平取を後にして、函館に戻る日となった。復路はほぼ往路と一緒だったが、室蘭から先は海路を選ばず、北海道三難路の一つ、礼文華山道（れぶんげさんどう）を越える陸路を選択した。今回の旅で最難関の区間を乗り越えたバードは、函館で通訳のイトーと別れ、横浜に向かう兵庫丸の乗客となった。途中で大嵐に遭遇し、横浜まで50時間の予定が、72時間もかかった。

バードの最終目的地だった平取。平取には萱野茂二風谷アイヌ資料館があり、復元した屋外展示施設もある（北海道平取町）
Bird's final destination, Biratori. The Kayano Shigeru Nibutani Ainu Museum and a restored outdoor exhibition is located here now (Biratori town, in Hokkaido).

北海道有数の難路だった礼文華山道。バードは苦労の末に峠越えをして、長万部側に下りた（北海道豊浦町・長万部町）
Rebunge Sandō which was one of the most difficult roads in Hokkaido. After she struggled to go down over the pass, she came down to the Oshamanbe side (Toyoura town, in Hokkaido, Oshamanbe town).

Open port Hakodate

The paddle steamer to cross the Tsugaru Strait was a small boat of around 70 tons. After surviving heavy seas and a storm, she arrived at the pier of Hakodate in the early morning. Hakodate was the same kind of open port as Yokohama and Niigata. So there were many Christian churches, and Bird stayed for nine days at the house of bishop Dening from the Church of England. After reporting about her travels to British Consulate, she visited a hospital, a prison etc. in Hakodate.

After a long stay in Hakodate, Bird went on Sapporo Hondō toward Mori. In Nanae, she saw apple cultivation, farm animals, an agricultural experiment station. She went through Jyunsainuma, Ōnuma, and arrived in Mori town. The place she stayed there is now said to be Abe Ryokan, which is now a manufacturer of famous station lunch box “Ikameshi”. From Mori, Bird went to Muroran by steamboat of Sinran Kouro which crosses Funkawan bay. After Muroran, which was still a lonely village, she continued by a rickshaw on the Sapporo Hondō.

Final destination, Ainu settlement

Bird traveled along Pacific ocean coast through Horobetsu, Shiraoi, Tomakomai, Yūfutsu, Atsuma, Mukawa. Around Tomakomai, she saw a volcano, and described that “pumice stones (from that volcano) was covering over the ground”. She went along the sea side from Yūfutsu to Atsuma and Sarufuto by a horse riding. The road to her final destination, Biratori, passed through a forest. Both sides of the narrow path were covered by plants.

She arrived finally in Biratori, and stayed at the house of Penriuku, a senior leader of Kotan. Over several days in Biratori, she researched Ainu manners and customs, ate food together, and bought bows and arrows, poisoned arrows, and daily necessities. She was also asked for medical treatment, and gave medicines to them.

Finally, the day to go back to Hakodate came. The return journey was the same as the way when she came, but she did not choose a sea route from Muroran, and chose a road route where she had to pass Rebunge Sandō, which is one of the most difficult three routes in Hokkaido. Bird had already survived the most difficult routes in her travel, so she said goodbye to her interpreter Ito, and became a passenger of Hyōgomaru to a direction to Yokohama. On the way, she met a big storm, and planed journey time of 50 hours took 72 hours.

■第2部
イザベラ・バード来日140年　顕彰プロジェクトの記録

1. 日本橋パネル展
2. 横浜シンポジウム
3. 日光シンポジウム
4. 北海道シンポジウム

日本橋「街道観光展2018」
テーマ　～古き良き日本へ ようこそ～
明治150年記念イザベラ・バード来日140年記念

■　事業概要
訪日外国人旅行者が増大、各地で街道の再評価と街道を通じたインバウンド促進が取り組まれている中、2018年の明治改元150年や英国人女性旅行家イザベラ・バード来日140年を機に、日本の街道・町並の観光魅力を国内外に訴求し、地域活性化を図るため、街道・国道の起点である日本橋において「街道観光展」を開催

■　開催期間　　平成30年11月27日（火）～12月16日（日）
■　開催場所　　東京都中央区日本橋室町1－3
　　国道４号地下歩道（東京メトロ三越前駅地下コンコース）
■　主　　催　　特定非営利活動法人全国街道交流会議、一般財団法人日本みち研究所、街道観光推進会議、街道交流首長会、名橋「日本橋」保存会
■　後　　援　　駐日英国大使館、中央区

■　展示内容
①　「街道の数だけ日本がある～日本百街道」（街道交流首長会）
②　来日140年記念　イザベラ・バード「日本奥地紀行」の旅
③　明治150年　土木コレクション2018 in 日本橋（土木学会）
④　明治150年　明治期に活躍した土木の偉人たち（土木学会）
⑤　日本遺産　六根清浄と六感治癒の地～日本一危ない国宝鑑賞と世界屈指のラドン泉～（鳥取県三朝町）
⑥　日本遺産（小浜市他）
⑦　中央区　まち歩き観光（東京都中央区）
⑧　旧街道を歩くためのみちに～ウォーカブルな日本橋（日本橋みち・まちづくり協議会）
⑨　東海道統一案内看板からのまちづくり（草津市立草津宿街道交流館）
⑩　ポスターセッション（富山県他）

～イザベラ・バード140年を記念して～

「道の駅」の新たな連携を考えるシンポジウム

■開催日程：令和元年6月9日（日）
■開催場所：横浜港大さん橋CIQプラザ
（神奈川県横浜市中区海岸通1-1-4）

■開催趣旨

イザベラ・バードが来日してから140年が経過。イザベラ・バードは横浜を出発して北海道まで旅行し、日本奥地紀行を出版、海外に日本を紹介。今回のシンポジウムは、道の駅や街道等を通じて地域観光の活性化を図ることを目的として開催。

■鼎談「イザベラ・バードの魅力を探る」

○(一財)日本みち研究所理事長、筑波大名誉教授
石田 東生氏

道の駅の連携を実際やろうとすると、具体的なテーマがないと中々むずかしい。イザベラ・バードが歩いたルート上には、「道の駅」が50くらいある。こういう「道の駅」がイザベラ・バードをテーマに、地域へのゲートウェイとして連携が強まれば良いと思っている。そして、イザベラ・バードが残した非常に詳細な細やかな描写は、これからの地方創生の視点の一つの非常に重要な情報源になると思う。

○株式会社JTBパブリッシング エグゼクティブアドバイザー
楓 千里氏

今後「道の駅」で外国人観光客を受け入れていくためには、案内機能、免税店機能、クレジットカード機能といった整備が具体的な課題となってくると思う。イザベラ・バードは、海外から日本に来て通訳をつれて東京から北海道まで旅をしている。日本でも、江戸時代、長い距離、旅をした女性の日記が残っている。イザベラ・バードとその女性の日記を重ね合わせ、人が旅をする意味を考えてみるのも良いのではないか。

○株式会社金谷ホテルベーカリー代表取締役社長
申橋 弘之氏

イザベラ・バードの魅力は、交渉力がある、観察力がすごく、絵や文章がうまい。恩人であるイザベラ・バードをもっと知ってもらうため、ホテルのフロントには写真を掲げている、歴史館の中でビデオを流している、パンフレットの中に紹介を載せる、宿泊客への館内案内の際にイザベラ・バードの話をする等、地道な活動を行っている。

～イザベラ・バード140年を記念して～
「道の駅」の新たな連携を考えるシンポジウム

■パネルディスカッション：「道の駅」の新たな連携を考える

＜オーガナイザー＞

一般社団法人　全国道の駅連絡会 理事／山形県飯豊町長　後藤 幸平氏

これから「道の駅」に外国人の方を呼ぶためには、我々が、この150年間で忘れてしまった、心の文化というか、物語、ストーリーを描いて何らかの形で「道の駅」同士が連携する、そうした大きな広がりをもって展開をする、そして、そこには人が必要なんだと思う。

物語を紹介し、もてなしをする人のいることがより大事なことで、それが地域振興にもつながっていくと思う。人で呼ぶ、歴史で呼ぶ、ロマンで呼ぶ、こういったことにつなげて行ければと思う。

＜パネリスト＞

株式会社JTBパブリッシング エグゼクティブアドバイザー　楓 千里氏

外国人の方は、どんどん地方に興味を持たれて今後増えていく。外国人の方は、歩くことを厭わない。そこで、整備がなされたイザベラ・バードの道をどんどん外国の方に歩いてもらうことで、そこに新たな交流が生まれるのではないかと思う。

「道の駅」の新たな連携の一つとして、イザベラ・バードが通った道に関連する大学とイザベラ・バードに関する研究、そして「道の駅」が連携することで、大学生が「道の駅」でイザベラ・バードの案内をする等、大学といったものを、もう一つの核として考えていくことで広がっていくのではないか。

特定非営利活動法人　東北みち会議　理事長　鐙 啓記氏

「道の駅」のネットワーク化については、イザベラ・バードのことを考えながら、地域のグループの人たちと一緒になって、県を超えたネットワーク化を行う。それによって情報発信力の強まりとか、「道の駅」同士、地域の人たちと「道の駅」がつながる大きなきっかけとなる等、いろいろあると思う。今後も、東北の「道の駅」をメインに、新潟とか、日光とか北海道とつながりながら、イザベラ・バードと道の駅をつかって何らかの新しい風を起こしたいなと思っている。

道の駅「きつれがわ」支配人　知久 祐一氏

喜連川は、“喜ぶ”という文字があるで、夢きらりスタンプラリーということで、福島県の喜多方、栃木県の喜連川、千葉県の大多喜も“喜び”という文字が入るので、この3つの「道の駅」が連携を取ってスタンプラリーを行っている。今は、誘いがあったら、とにかくに出て行って、自分たちをPRしようということが一つのモットーになっている。「道の駅」の連携は、いろいろな可能性があると思う。

～イザベラ・バード140年を記念して～
「道の駅」の新たな連携を考えるシンポジウム

〇パネルディスカッション　まとめ

＜コーディネーター＞
筑波大学 名誉教授／一般財団法人 日本みち研究所 理事長 石田 東生 氏

・残念ながらイザベラ・バードの知名度は、あまり高くない。
「道の駅」の連携も、それほど進んでいないという厳しい現実がある。そこを、これから皆さんと一緒にイザベラ・バードとの繋がり方、地域との繋がり方、「道の駅」同士の繋がり方について、関係者の進んでいこうとの力強いお話があったので、さらに展開していきたい。

・今日は横浜で、イザベラ・バードと「道の駅」との関係性について議論した。全国道の駅連絡会と日本みち研究所が連携して、横浜を出発点として、日光、会津、新潟、山形、秋田、最終的には北海道まで。

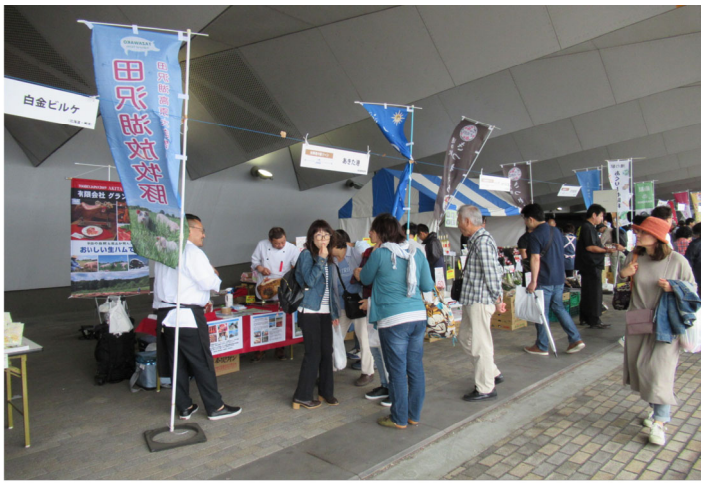
・2020年が奥地紀行の出版140周年にあたる。イザベラ・バードが感動した、良いアイヌ（民族）がたくさんいる、北海道の平取、そのすぐそばに2020年に多文化共生空間がオープンする。

・それを見据えながら、このような集まりをイザベラ・バードが辿ったところの要所要所で進め、イザベラ・バードの知名度を上げる、「道の駅」との連携を、いろいろな方々からの知恵を拝借しながら、具体的な議論、展開を図っていきたいと思っている。

今後もご協力頂きたい。

～イザベラ・バード140年を記念して～

「道の駅」の新たな連携を考えるシンポジウム



パネル展　開催
（横浜港大さん橋CIQプラザ）

同時開催
第12回横浜港大さん橋マルシェ
（全国から「道の駅」21駅がブース出店）

■建設工業新聞（2019年6月25日（火）掲載

新たな連携探る

全国道の駅連絡会シンポ
イザベラ・バードがテーマ

全国道の駅連絡会（会長・石井裕千葉県南房総市長）は9日、横浜市の横浜港大さん橋CIQプラザで「道の駅の新たな連携を考えるシンポジウム」を開いた＝写真。明治初期に日本を旅した英国女性旅行家イザベラ・バードが触れた日本の魅力を再認識し、その足跡に関係する道の駅が協働する方策を探った。

冒頭、連絡会の後藤幸平理事（山形県飯豊町長）は「彼女が明治時代に見た日本文化の魅力を振り返り、それを道の駅の表現に役立ててもらいたい」と述べた。来賓の石原康弘関東地方整備局長は「道の駅は今や旅行の目的となり、地域振興の核という役割を担う。道の駅の新たなステージに向けた意義深いシンポジウムだ」とあいさつした。

シンポジウムはバードの来日から昨年で140年が経過したことを記念し企画した。バードが旅した道と途中で関心を持った風景、文化などを地域の宝と捉え、ルート沿いにある道の駅の連携について、道の駅関係者や学識者、旅行の専門家などが鼎談（ていだん）やシンポジウムで議論を深めた。

道の駅が情報を共有した上でイベントを連携展開する必要性が示された。道の駅を拠点に観光客をバードにゆかりがある場所に誘導する仕組みの充実を求める声もあった。より多くのインバウンド（訪日外国人旅行者）を呼び込む方策として、案内機能の強化や免税・クレジットカード対応店の設置増加などが挙がった。

イザベラ・バードと道の駅を考える会議 in 日光

■ 開催日程：令和元年11月21日（木）
■ 開催場所：【会議】田母沢御用邸　研修ホール
（栃木県日光市本町8-27）
■ 開催趣旨
○ イザベラ・バードが1878年に来日、旅行されて1880年に本を出版しており、今年は執筆140周年にあたる。訪日先駆者であるイザベラ・バードを記念して、バードの旅路でこのような会議・シンポジウムを開催
○ 今回で第2回目はバードが非常に気に入って長く滞在された日光で開催。
（第1回は今年の5月には日本に初上陸した横浜で第1回を開催）

■話題提供

○(一財)日本みち研究所理事長、筑波大名誉教授
石田 東生氏
テーマ「全国におけるイザベラに関する取組みや今後の展開の可能性」

道の駅とイザベラ・バードとの連携強化が重要。歴史的価値が非常に強く、女性目線で江戸、大阪、京都など描写されている。周辺に立地する道の駅も多く道の駅の連携に役立つと考え、イザベラ・バードをテーマに取り組む予定で訪日外国人の誘致でも役にたてると考えている。
横浜、日光に続き、東北でも開催を予定、ゴールは2020年に北海道で開催できればいいと考えている。

○株式会社JTBパブリッシング エグゼクティブアドバイザー
楓 千里氏
テーマ「イザベラ・バードを観光資源としてインバウンドを誘致する工夫」

欧米豪訪日外国人旅行者の意向調査にて、アジアはリピーターが多く全体数も多いが、欧州はアジアに比べると低く今後の可能性がある。オリンピックの後どこに行きたいかのランキングでは日光も含まれるが東北が含まれておらず、伸びしろがある。日光とイザベラ・バード等、とっかかりがあれば誘致の可能性あるので広がっていくのではと考える。

イザベラ・バードと道の駅を考える会議 in 日光

〇株式会社金谷ホテルベーカリー代表取締役社長　　申橋　弘之氏
・テーマ「日光におけるイザベラ・バードの観光資源、今後の展開可能性」

金谷ホテルにとってイザベラ・バードは恩人である。
栃木県の観光は、魅力度では下の方で問題意識があり、日光はランキング上位だが栃木でランキングに入っているのは日光のみ。日光は観光資源の点で自然景観は恵まれているがイザベラ・バードはおもてなしに感動している。
今後の展開可能性としてはイザベラ・バードが絶賛した「もてなし」を実践できているのか再点検を考えるべき。また日光と足利で周遊できるよう連携を考えていきたい。

〇特定非営利活動法人 東北みち会議 理事長　鐙 啓記氏
・テーマ「東北地方におけるイザベラ・バードに関する取組み紹介」

県内では十三峠ツアー、イザベラ・バードの石碑や記念室、山形アルカディア観光局等、さまざまな取り組みが行われてきている。
日光はバードが奥地紀行で紹介するまで欧米で未知だったが、出版後一挙に名前がヨーロッパに広まりその後欧米観光客が増えた。山形ではアルカディアの恩人として賞賛の動きがある、バードは貴重な記録を残しており、いろいろな本や事を組み合わせて考えることでバードの本当の意味合いが分かってくるので、バードを大事にしながら道の駅を組み合わせて取組んでいきたい。

〇一般社団法人北海道開発技術センター理事・地域政策研究所長
原 文宏氏
・テーマ「北海道地方におけるイザベラ・バードに関する取組み紹介」

北海道：イザベラ・バードの辿った道をめぐる会で活動、日本風景街道やNPO北海道推進フォーラム等をからめて展開を考えていきたい。
今後の展開として道の駅、シンコヤ北海道、北海道エコ・モビリィ研究会などと連携してフットパス＋サイクルツーリズム、アドベンチャートラベルなどをやる予定。北海道推進フォーラムでは、学校の地域学習の教材でイザベラ・バードを使いたい。

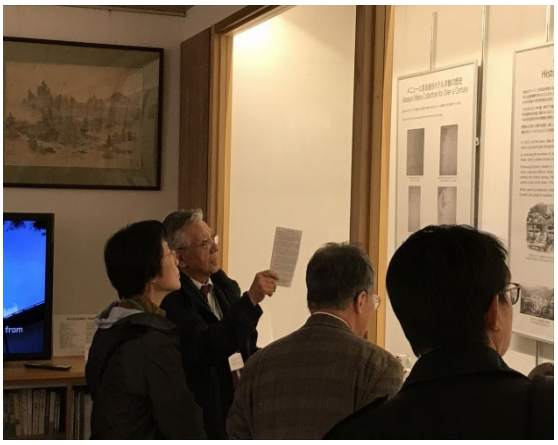
イザベラ・バードと道の駅を考える会議 in 日光

〇会場から：とうほく街道会議・山屋氏
会津美里町旭の歴史を語る会・櫻井氏
西会津町・佐藤氏

バードはあまり知られていないので国内でもっと知ってもらいイギリスにも発信すべきで、今後バードのネットワーク、交流会議やアルカディア会議、道の駅も交え、日光などと広域連携していき個性ある地域づくりにつなげていくことが重要と考える。（山屋氏）
地域の過疎化が進んでいる中、隣町等との連携・ネットワークづくりをしていきたい。（櫻井氏）
イザベラが称賛した部分や避難した部分にばかりとらわれるのではなく、イザベラ・バードの目を通して、先人の暮らし文化などについて学びたいと思っている（佐藤氏）

②意見交換まとめ（石田先生）

- 各地域で様々な活動がされており、イザベラ・バードの存在の価値は非常に大きいことを確認。
- 活動が停滞している地域が多いところが気になった。連携が必要。
- イギリス人を中心に、バードに関して海外発信を考えていく。
- 楓先生から「異日常」というキーワードをいただいたが、欧米人の関心が高いのが「里」である。イザベラ・バードはそこを楽しんだと推測される。そこへのゲートウェイとして道の駅の役割は何か。第3ステージとしての飛躍が大事なポイントとなる。
- 今後検討を進めていきたい



会　議　：　田母沢御用邸　研修ホール　　**現地視察**　：　金谷ホテル歴史館

イザベラ・バードと道の駅を考える会議 in 日光

③今後のイザベラ・バードに関する取組みについて「日光宣言」

　2020年の『日本奥地紀行』出版140周年記念をキーワードとして、イギリスの女性旅行家であるイザベラ・バードを観光資源とすることで、地域活性化を図ります。まずは多くの人にイザベラ・バードのことを知ってもらい、足跡をたどり、関連する地を訪れていただけるよう努力します。観光への対応を行うにあたり、以下の取り組みを予定しています。
　イザベラ・バード、地域、道の駅、日本風景街道など、地域の資源を活かした観光等の連携を進めていきます。
　イザベラ・バードの旅路に沿い、継続的にシンポジウムや会議等を開催することで、関係者間で情報共有を行い、具体的な連携案を検討します。横浜、日光に続き、新潟県、山形県等で開催した後、令和２年度に北海道の白老で開催することを想定しています。
イザベラ・バードの記念物として、記念碑や案内パネル、看板などを設置し、足跡をたどる拠点とします。「とるぱ」を活用することも想定しています。
今後、連携協議会を立ち上げ、活動の円滑化を図り、具体のメニュー検討を進めます。例えば具体メニューとして、
①道の駅へのパネル設置
②観光誘致のためのマップ・記念物等の作成
③インバウンド（イギリス等）への情報発信

以上、イザベラ・バードに関する取り組みを行っていくことを宣言いたします。

令和元年11月21日

特定非営利活動法人東北みち会議　理事長　鐙 啓記

北海道シンポジウム

〈歴史と文化から地域の未来を考える〉
～イザベラ・バードが辿った“みち”を活かして～ フォーラムの開催

国土交通省

2020年11月6日(金)
歴史と文化から地域の未来を考える～イザベラ・バードが辿った“みち”を活かして～(室蘭市)

○民族共生象徴空間「ウポポイ」の開業を踏まえ、アイヌ文化ゆかりの地であり、また英国人旅行家で「日本奥地紀行」の著者イザベラ・バードが辿った地でもある胆振・日高地域の**歴史**や**文化**、**景観**などの様々な地域資源について理解を深めることにより、**広域交流のより一層の促進**及びシーニックバイウェイ北海道の取組や道の駅との**連携を通じた地域づくりの活性化**を図ることを目的として、フォーラム及びパネル展を開催しました。
○市内外から、一般、官公庁、民間企業等、多岐にわたる150名が参加し、バードの辿った“みち”を観光や地域活性化にどのように活用するかの方策を探りました。

参加者数：150名

●日時：2020年11月6日(金) 13:30～17:05
●場所：室蘭市市民会館 大ホール

・13:30～13:40　開会挨拶
・13:40～14:50　〈第1部〉基調講演
・14:50～15:20　〈第2部〉地域の現状報告
・15:35～17:05　〈第3部〉トークセッション
※受付周辺(ホワイエ)ではパネル展を開催

▲ポスター

[主　催] 歴史と文化から地域の未来を考える～イザベラ・バードが辿った“みち”を活かして～実行委員会
[構成員] イザベラ・バードの道を辿る会、(一財)日本みち研究所、北海道地区「道の駅」連絡会、(一社)北海道開発技術センター、(一社)シーニックバイウェイ支援センター、北海道開発局、室蘭開発建設部、北海道
[事務局] 室蘭開発建設部、(一社)北海道開発技術センター
[後　援] 室蘭市、白老町、平取町、(公財)アイヌ民族文化財団、NPO法人ほっかいどう学推進フォーラム

▲パネル展の様子

■開会挨拶

イザベラ・バードが辿った“みち”を活かして実行委員長
石田 東生氏

北海道開発局 建設部長
橋本 幸氏

■第1部：基調講演

シーニックバイウェイ北海道・道の駅第3ステージとイザベラ・バード
筑波大学 名誉教授
石田 東生氏

イザベラ・バードの辿った北海道の道
イザベラ・バードの道を辿る会
会長　金子 正美氏

■第2部：地域の現状報告

ウポポイと白老の“みち”
(公財)アイヌ民族文化財団
専務理事　今井 太志氏

日高の恵みを
美しい感動と出会う道で
“シーニックバイウェイで
魅力ある観光空間づくり”
新ひだか町商工会
事務局長　渡辺 勝造氏

■第3部：トークセッション

イザベラ・バードが辿った“みち”を現代に活かす

〈コメンテーター〉
石田 東生氏
〈コーディネーター〉
原 文宏氏
〈話題提供者〉
新保 元康氏
笹森 琴絵氏
今井 太志氏
山本 清二氏

〈歴史と文化から地域の未来を考える〉
～イザベラ・バードが辿った“みち”を活かして～ フォーラムの開催

国土交通省

■第1部：基調講演

シーニックバイウェイ北海道・道の駅第3ステージとイザベラ・バード

石田 東生氏（筑波大学 名誉教授）

現在日本は危機的な状況にあり、コロナ禍が追い打ちをかけている。この危機に立ち向かうのが、シーニックバイウェイ、道の駅第3ステージ、イザベラ・バードであると考えている。道の駅第3ステージ推進のためには地域力の向上が必要で、シーニックバイウェイ北海道やイザベラ・バードの旅と連携すべき。ぜひこの地域でも連携の輪を広げていってほしい。地域の魅力を再発見し、ぜひそれを活用いただきたい。

イザベラ・バードの辿った北海道の道

金子 正美氏（イザベラ・バードの道を辿る会 会長）

GISを用い、現在の地図に当時の地図および衛星画像を重ね合わせ、当時イザベラ・バードが辿ったと考えられている道を再現。環境保全と観光の両立により地域振興ができればという考えから当会を立ち上げ、フットパスコースや看板の作成等を行っている。SDGs達成のため、前向きな内容だけでなく、多くある課題についても十分検討すべき。シーニックバイウェイ等とも連携し、パートナーシップで目標を達成出来るよう取り組んでいく必要がある。

■第2部：地域の現状報告

ウポポイと白老の“みち”

今井 太志氏（(公財)アイヌ民族文化財団 専務理事）

本年7月12日に開業した民族共生象徴空間「ウポポイ」の開業～現在までの様子を紹介。修学旅行生(西日本等)の来場もあり、来場者数は少しずつ増えてきている。今後のウポポイの成長に期待いただきたい。ウポポイ開業により、現在白老町内も、民間投資によるレストランや日帰り温泉等が整備される等の変化を遂げており、今後も魅力的なプロジェクトが展開される予定。ウポポイと白老町のさらなる魅力向上に期待いただきたい。

日高の恵みを 美しい感動と出会う道で“シーニックバイウェイで魅力ある観光空間づくり”

渡辺 勝造氏（新ひだか町商工会 事務局長）

日高地方の美しい観光資源や地域資源を紹介。JR日高線 鵡川～様似間の廃線が決定したことで、日高自動車道の整備を待ち望む声がある。道路整備は観光振興にも大きな意味を持ち、日高地域にてシーニックバイウェイのルート立ち上げのため活動を進めているが、地域の認知度は未だ低いのが現状。環境に優しい新しい旅の形を作っていきたい。

■第3部：トークセッション

〈テーマ〉
イザベラ・バードが辿った“みち”を現代に活かす

コメンテーターの石田氏、コーディネーターの原氏を中心に、異なる分野で活動を展開している4名とともにトークセッションを行いました。

【コメンテーター】
石田 東生氏
（筑波大学 名誉教授）

地域を見る目に長けたバードが書き残した当時の様子を、ほっかいどう学やICTの力を借りて観光や学びの場に活かしてほしい。シーニックバイウェイに海の道(森蘭航路)を。

【コーディネーター】
原 文宏氏
（(一社)シーニックバイウェイ支援センター代表理事）

当地域は資源が溢れているが潜在化していると感じる。歴史・文化軸の資源の可能性は他地域より高い。モビリティ(フットパスや森蘭航路)も用いてバードを活かしてほしい。

新保 元康氏
（NPO法人ほっかいどう学推進フォーラム 理事長）

バードについて学ぶことで、アイヌ文化への理解や道の大切さを伝えることができると考えている。教育に旅を取り入れることで知的好奇心への好影響も期待できる。教育も物語の積み重ね。ほっかいどう学にも活かしたい。

笹森 琴絵氏
（イザベラ・バードの道を辿る会 室蘭支部 会長）

室蘭で定着している海洋観光にはバードの歴史を、バードの軌跡には新しい風を取り込みたい。森蘭航路で森町とも連携している。観光はSDGs達成にも寄与すべき。既存のものを活かしつつ垣根を越えて連携していきたい。

今井 太志氏
（(公財)アイヌ民族文化財団 専務理事）

バード、噴火湾、アイヌ文化という切り口で平取にも関心を持っていただくことを期待。道外の方にとっても何度訪れても面白いエリア。ぜひウポポイにもお越しいただきたい。

山本 清二氏
（室蘭開発建設部 次長）

我々は地域の方々の頑張りを支える立場。道の駅第3ステージ達成に向け、また日高地域のシーニックバイウェイルート立ち上げに協力していきたい。

北海道シンポジウム

〈歴史と文化から地域の未来を考える〉
～イザベラ・バードが辿った"みち"を活かして～ フォーラムの開催

国土交通省

■パネル展の開催

胆振・日高地域の歴史や文化、景観などの様々な資源に関するパネルを展示し、多くの方にバードの辿ったみちや地域資源を知っていただくきっかけとなりました。

▲パネル展の様子

▲イザベラ・バード、日本奥地紀行、炭鉄港、白鳥大橋インフラツーリズム

▲シーニックバイウェイ北海道「秀逸な道」

■新型コロナウイルス感染拡大防止対策

新型コロナウイルス感染拡大防止のため、様々な対策を展開しました。

《会場入場の際の対応》

▲検温の実施・手指消毒の励行

▲感染防止啓発ポスター(2種)の掲示

《シンポジウム開催中の対応》

▲登壇者間の飛沫防止パネルの設置・ソーシャルディスタンス(1～2m)の確保

▲入場者数の制限と座席間隔の確保
（150名参加／定員500名）

■オンライン配信に向けた映像撮影

コロナ禍の状況等を踏まえ、後日オンラインによる配信を行うため、フォーラム会場の様子をリアルタイムで撮影しました。

■フォーラム参加者の感想（一部抜粋）

- 室蘭市発行の会報で知り楽しみにして居りました。コロナ拡大の中、準備下さった皆様に感謝申上げます。
- トークセッションがとても面白く役立った。これらのアイデアを是非実現して下さい。北海道の未来が明るくなることでしょう!!
- 今後、何かと関心を持ちたいと思った。
- イザベラ・バードさんに興味があります。「辿った道」についてもっと知りたいと思いました。そして「みち」を生かして(活かして)北海道がもっともっと元気になれたらいいなと思います。
- 日高地域が国立公園になる事とてもうれしいです。雄大な海岸線を走りサラブレッドが見える日高地方、増々発展してほしいです。イザベラ・バードの本を読んでみようと思いました。

〈歴史と文化から地域の未来を考える〉
～イザベラ・バードが辿った"みち"を活かして～ フォーラムの開催

国土交通省

■北海道新聞 室蘭・胆振版（2020年11月4日(水)掲載）

「日本奥地紀行」出版140年

バードの足跡から 日胆の歴史知る

6日室蘭でフォーラム

観光や地域振興 活用探る

明治期にアイヌ民族の生活や北海道の風土を記録した英国人旅行家イザベラ・バードの足跡をたどり、胆振・日高の歴史や文化について理解を深めるフォーラムが6日、室蘭市市民会館（輪西町）で開かれる。バードの「日本奥地紀行」が出版されてから今年で140年。アイヌ文化復興拠点「民族共生象徴空間（ウポポイ）」の開業を踏まえ、バードの足跡を観光や地域振興に生かす策も探る。

「イザベラ・バードの道を辿る会」や開発局などでつくる実行委が主催する。

バードは1878年（明治11年）に横浜を出発して東北、北海道を旅した。道内では函館から室蘭、白老、平取まで訪ね、アイヌ民族の暮らしを記録した。

フォーラムでは、実行委員長でもある筑波大名誉教授の石田東生さん（交通計画、都市計画）らが、道路沿いの景観を生かして観光振興を図る「シーニックバイウェイ」の取り組みや、バードがたどったルートと現状などを話す。

最後にパネルディスカッションを行い、バードの足跡やウポポイといった地域資源をどのように観光に生かすか、石田さんや「辿る会」室蘭支部の笹森琴絵会長（酪農学園大特任准教授）らが議論する。

午後1時半から。入場無料。先着200人で、事前申し込みが必要。希望者は実行委☎011・738・3363、ファクス011・738・1889、メールisabella@scenicbyway.jpへ。

（高木乃梨子）

イザベラ・バードの足跡から日胆の歴史を学び、観光振興策を探るフォーラムのポスター

■北海道新聞 室蘭・胆振版（2020年11月7日(土)掲載）

バードの道 観光資源に

室蘭で地域振興フォーラム

明治期の英国人旅行家イザベラ・バードの足跡をたどって地域振興を考えるフォーラム（「イザベラ・バードの道を辿る会」などの実行委主催）が6日、室蘭市市民会館（輪西町）で開かれた。市内外から参加した150人が、バードの歩いたルートをどのように観光などに活用するか方策を探った。

基調講演では、実行委員長でもある筑波大の石田東生名誉教授が地方の交通政策などをテーマに話した。石田名誉教授は道路沿いの景観を生かす「シーニックバイウェイ」や道の駅と、バードの歩いたルートを連携させて、新たな観光振興を図ることを提言した。

続いて、同会の会長で酪農学園大環境共生学類の金子正美教授が、地理情報システム（GIS）を使って重ねた明治、昭和期と現在の胆振、日高管内の地形図をスクリーンに投映。バードの歩いたルートと合わせて紹介した。「絵のように美しい」と彼女が表現した室蘭などでの足跡も動画や地図でたどった。

後半は、石田名誉教授ら専門家によるパネルディスカッションが行われた。

（高木乃梨子）

新たな観光振興について提言する石田東生名誉教授

北海道シンポジウム

〈歴史と文化から地域の未来を考える〉
～イザベラ・バードが辿った“みち”を活かして～ 現地視察（エクスカーション）

国土交通省

2020年11月7日(土) 9:00～15:30（於 白老町、日高町、平取町）

時間	場所
9:00	ホテルルートイン東室蘭駅前 発【バス移動】
9:45	①民族共生象徴空間「ウポポイ」(白老町) 着
10:00	①アイヌ民族博物館 視察【約60分】
11:00	①民族共生象徴空間「ウポポイ」施設内視察【約30分】
11:30	①民族共生象徴空間 「ウポポイ」(白老町) 発【バス移動】 ・車中にて昼食
12:45	②富川東運動公園(日高町) 着 ・フットパスコースのスタート地点 ・トイレ休憩後、フットパスポイントNo.4までバス移動【約17分・3.5km】 ・車内では平村氏による解説
13:02	③フットパスポイントNo.4(日高町) 着 ・去場生活館までウォーキング【約90分・5.9km】 ・随時、柳氏による解説
14:30	去場生活館(平取町) 着 ・トイレ休憩【約15分】
14:45	去場生活館(平取町) 発 ・義經神社までバス移動【約15分・7.4km】 ・車内では柳氏による解説
15:00	④義經神社(平取町) 着 ・フットパスコースのゴール地点 ・義經資料館・義經神社の見学【約30分】
15:30	④義經神社(平取町) 発【バス移動】
16:40	新千歳空港 着→発【バス移動】
17:40	札幌駅 着

〈現地ガイド及びアテンド〉

イザベラ・バードの道を辿る会	会長	金子 正美氏
〃	事務局	平村 徹郎氏
〃	平取支部 部会長	柳 秀雄氏

〈参加者〉
20名（～イザベラ・バードが辿った”みち”を活かして～実行委員会関係者 ほか）

〈歴史と文化から地域の未来を考える〉
～イザベラ・バードが辿った“みち”を活かして～ 現地視察（エクスカーション）

国土交通省

①民族共生象徴空間「ウポポイ」・アイヌ民族博物館

金子氏による車内での解説

民族共生象徴空間「ウポポイ」・アイヌ民族博物館の視察
〈10:00～11:30〉

昼食
（しらおいハーブ弁当）

平村氏による車内での解説

②富川東運動公園

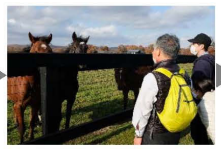
柳氏による解説

フットパスコース スタート地点
〈13:00〉

③フットパスポイントNo.4

柳氏による解説

フットパスコース視察の様子
（日高町～平取町）


サラブレッド牧場付近
〈13:30〉

サケ遡上の確認
〈13:45〉

④義經神社

紫雲古津大橋左岸(写真左)・右岸(写真右)にて
設置看板の確認
〈14:00～14:15〉

平取町かわまちづくりに
関する事業看板の確認
〈14:20〉

フットパスコース ゴール地点
〈15:00〉

義經資料館の見学
〈15:15〉

義經神社の見学
〈15:30〉

■現地視察参加者の感想（一部抜粋）

・バードとフットパス、サイクリング、ドライブなどとかけあわせて実践を通して課題を見出して解決し、ソフィストケイトしていくことが大事だと思います。
・バード、道の駅、シーニック、ほっかいどう学、アイヌ等、様々なキーワードが複合的に絡むとても有意義なフォーラム、エクスカーションの2日間でした。皆様の熱い想いに感動し感謝しています。ありがとうございました。
・関係者のみの参加では非常にもったいない！次回は一般の方もぜひ！
・実りの多い2日間でした。バードさん来てくれてありがとう。
・北海道に人あり、北海道に歴史あり、北海道に物語ありを再認識。これをもっともっと子どもたちに伝えたいと思いました。
・日常の忙しさから離れ、歴史、文化、雄大な自然を感じることができました。体験型観光の素晴らしさを実感することができたと思います。

■第３部
顕彰プロジェクトのこれから

■顕彰プロジェクトのこれから

イギリスの探検家であるイザベラ・バードが明治11年（1878）に来日し、横浜から東北、北海道までを数か月間かけて旅行、そして『日本奥地紀行』が出版されて140周年を記念キーワードとして、2020年以降これまで、横浜、日光、室蘭とシンポジウムを開催してきた。

これまでの取組みから、具体には今後下記の取組みを進めていくことを提案する。

○ 今後は、より多くの人に女性一人旅のパイオニアでもあるイザベラ・バードのことを知ってもらい、イザベラ・バード、地域、道の駅、日本風景街道など、地域の資源を活かした観光等の連携を進めていき、各地における地域活性化を図っていく上での観光資源とすることで活用していくことが重要である。

○ 旅路周辺には立地する道の駅が多い。また道の駅以外にも、日光金谷ホテル歴史館や南陽市ハイジアパーク館内などにはイザベラ・バード記念コーナーが設置されており、これらの道の駅等と連携を図り、イザベラ・バードの記念物として記念碑や案内パネル、看板などを設置し、足跡をたどる拠点とするとともに、観光誘致のためのマップ・記念物等の作成を検討していく。これは「道の駅」にとっても地域のゲートウェイとしての役割は何か、第3ステージとしての飛躍上大事なポイントとなるとともに、道の駅同士の連携にも効果があると考える。

○ イザベラ・バードがたどった旅路は、日本風景街道ルートとの重なりも多い。シーニックバイウェイ北海道、関東・東北地域の日本風景街道ルートとの連携・活用、さらに、イザベラ・バードが東洋のアルカディアと評した「山形置賜地域ほかの自然　景観」を「とるぱ」として活用し、自然景観自体による地域活性化・観光振興が必要である。

○ 欧米人の関心が高いのが「里」であるが、イザベラ・バードはそこを楽しんだと推測される。イザベラ・バードの足跡を国内外の多くの人に知ってもらい、さらにイザベラがたどった足跡を母国イギリスをはじめとする国内外の観光客に訪れてもらうため、情報発信を検討する。
イザベラがたどり、「東洋のアルカディア」と評した山形を含む東北地方は、国内他地方に比べて欧米等からの旅行客が多くないのが現状であることが課題であるが、今後のアフターコロナ下、「イザベラ・バード」をキーワードとしたインバウンド観光振興策の展開が、東北地域の観光を復興・振興上効果が期待できると考える。

○ 今回のプロジェクトを通してイザベラ・バードの存在の価値は非常に大きいことがわかった。また同時に活動が停滞している地域が多いところもわかった。
イザベラ・バードの旅路に沿い、地域間の連携を考え、今回設立した「イザベラ・バードのみち交流連携ネットワーク」内での連携強化し、地元自治体、アルカディア街道ＩＢ倶楽部、とうほく街道会議、関東・東北・北海道の道の駅連絡会等の関係組織との情報共有、交流を深め、連携協議会を立ち上げによる活動の円滑化を検討、継続的にシンポジウムや会議等を開催することで、関係者間で情報共有を行い、具体的な連携案を検討していくことが必要である。特に諸事情により開催できなかった北陸・東北各地においての開催を模索する。さらに具体のメニュー検討を進めていくことが重要であると考える。

以上